
夢幻の境界

LUNA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻の境界

【Nコード】

N6236P

【作者名】

LUNA

【あらすじ】

いつもと変わらぬ風景と、いつもと違う親しい者たち・・・
幻想郷で起こった誰も気づいていない異変。
そんな物語です。

序章（前書き）

pixivに投稿している小説を転載してるだけです。

できればpixivのほうにもコメントなど頂けると嬉しいです。

`http://www.pixiv.net/member.php?id=1813181`

序章

握った手は温かく、弱々しくも優しさに満ちている。

布団の中でこちらを見上げる老婆の顔は、若かりし日の面影を残している。だが、女にとってはほんの数日前のように思い出せるあの頃の姿は、今はもうそこにはなかった。

「
」
わずかに口を動かした老婆に、女は少しだけ顔を近づけた。

老婆が握る手に僅かだが力を込めると、小さく笑った。

女はその手を握り返し、老婆の頬に手を伸ばした。

しわくちやになってしまったが、いつも隣で見ていた愛しい顔は昔と変わらぬ笑顔を向けてくれた。

「どうしたの？」

言って、女も笑顔を返した。

老婆はそれを見ると、どこか満足気に微笑んだ。

だが、女は何のことか分からず首をかしげた。もしかしたら、さつき口を動かしたように見えたのは、「笑って」と言っていたのかもしれない。そう考えると、さつきまで自分はどんな顔をしていたのだろうか。心配されるほど情けない顔をしていたのだろうか。ともすれば、老婆が「どうしたの？」と聞き、女が同じ言葉を聞き返してしまっていたのかもしれない。しかし、そうなると満足そうな表情の理由が分からない。

女は老婆に笑った理由を聞こうと口を開き　しかし、開いた口は何も語ることなく閉じた。

頬を撫でる手で老婆の前髪をかき分け、こちらを見る優しげな目を見つめる。

まったく、なんて無粋なことを考えていたのか。

女は自嘲気味に笑うと、老婆に囁いた。

「おやすみなさい」

老婆は微かに頷くと、ゆつくりと目を閉じる。

女は老婆の頭を撫で、その後、額にキスをした。

「さようなら。いつか、またここにいらっしやい」

女が顔を上げた頃には、老婆はもう二度と目を開くことはなかった。

縁側に座る女の髪を、夜風がなびかせる。

金糸のような美しい髪は、月の光を浴びて夜空に輝く星のようにも見える。

ただ、月の光で輝いているのは髪だけではなかった。

女の頬を涙が伝い、きらきらと光りながら膝へと落ちる。

しかしそれを拭うこともせず、女は縁側に座りながら月を見上げていた。

千年以上も昔から見ている月は変わることなく女を照らしているというのに、周りにいる者たちは瞬く間に変化していく。

流れるような美しい黒髪は白くなり、軟らかくたおやかな手はしわだらけになっていく　そんなことを、あとどれだけ見守り続けなければならぬのか。

女はうつむき、顔を両手で覆った。

止まることのない涙は手のひらを濡らし、指の隙間から滴となつて落ちていく。

「……」

どれくらいそうしていただろうか。微かに聞こえていた虫の鳴き声は止み、涙もいつの間にか止まっていた。

女は顔を上げると、頬を濡らしている涙を袖で拭った。

ふと右を見ると、そこには見慣れた人影があった。

人魂を纏い屹立する女性は、静かに歩み寄ってきた。

「幽々子？　どうしてここに……」

幽々子と呼ばれた女性は、女の側まで歩み寄り、普段とは違う表情でこう言った。

「紫、あなたに話したいことがあるの」

視界が徐々に掠れ、煙に包まれるかのように世界が白で塗りつぶされていく。

知るはずのない　だが確かに記憶にある光景がよく知る人物の記憶だと気付くと同時に、それは霧が晴れるかのようにかき消されていった。

そして白の世界に一筋の光が差し込み、少女は目を覚ました。いままで見ていた彼女の記憶を全て忘れたままで。

一章 (Part 1)

この世界には、妖怪や妖精、神霊などの存在がいる。もちろんそれらの存在はどこにでもいるわけではない。

『幻想郷』と呼ばれる、山間の一部の土地にのみいるのだ。

そんな小さな空間を何故ひとつの世界として見るのかというと、それには大きな理由がある。

幻想郷はふたつの大きな結界によって外界から隔離されているのだ。完全に外界から隔離され認識すらできないのだから、それはもうひとつの世界と呼べるだろう。

ひとつは『幻と実体の境界』と呼ばれ、この結界によって外界で忘れ去られ、幻となった生物や道具が幻想郷に流れ込むようになっているのだ。そのため、幻想郷では外界で力を失った妖怪たちが集まるようになった。

そしてもうひとつは『博麗大結界』と呼ばれる常識の結界である。これは幻想郷を『非常識の内側』とすることにより、外界の幻想を否定する力を利用して幻想郷を保つという、論理的な結界である。当然これほど強大な結界を支えるには、これらを管理できるものがある。

『幻と実体の境界』は、現在の幻想郷の創造に立ち会い、ふたつの結界を造った張本人である、八雲紫という妖怪である。彼女は千年以上も生き、この幻想郷を守り続けている。実際は、彼女の式神である八雲藍という九尾の狐の妖怪が管理しているのだが。

『博麗大結界』は、代々博麗の巫女が博麗神社に住みながら管理しており、現在の巫女である博麗霊夢も、先代から受け継いだ神社を守りながら結界の管理を続けている。

もともと、管理といえるほどのことはしておらず、結界が緩んでいないか見張っているだけである。しかも神社でありながら、霊夢を慕う妖怪たちが集まるせいで人間たちはほとんど近寄らなくなっ

てしまっている。そのため信仰は雀の涙ほども集まらず、お賽銭は言わずもがなである。お賽銭が期待でいない以上、別の方法で収入を得るしかなく、霊夢は幻想郷で起こる異変の解決を生業としている。

ただ、最近では異変と呼べるほどのものは起こっておらず、一番の収入源を断たれた博麗神社は深刻な財政難に陥っていた。

「……お腹すいた」

財政難による食料不足でまともな朝食すら食べれずにいた霊夢は、縁側に座ってお茶をすすりながらそんなことを呟いた。

小鳥のさえずりを聞きながらのんびりとお茶を飲む そんな誰も羨むような生活を腹の虫が台無しにするものだから、霊夢は特に感慨に浸ることなく空を見つめるばかりだった。

このまま空腹を耐え続けるくらいなら、もう一度布団に包まって寝てしまおうか、とも思う。

12月にもなると朝は屋内の空気も冷え切っており、布団の温もりにはなかなか捨てがたいものがある。

そんなことを考えながら空を仰いでいると、突如霊夢の隣の空間が裂けた。

裂け目からは無数の眼光が見え、全てを飲み込みそうな、そんな不気味さを持っている。

普通の人間が見れば愕然とする光景も、霊夢にとってはもはや見慣れたものだった。

「何か用？ 紫」

霊夢が呼びかけると、空間の裂け目から一人の女性が現れた。

それはもはや理解の範疇を超える有様だった。が、この幻想郷をよく知るものなら、この不可解な現象も納得できる。

幻想郷に生きる人間や妖怪たちは、それぞれ特殊な能力を持っている。

この世の道理では測れぬそれは、ここでは日常的に使われている。そのため、初めて見たものなら驚きはすれど、理解できぬほどのこ

とではないのだ。

ただし、彼女　八雲紫の能力は、そんな幻想郷に生きる者たちでも理解するには強力に過ぎるものではあるのだが。

『境界を操る程度の能力』　境界と名の付くもの全てを操ることのできるこの能力は、神に匹敵する力とも言われており、物理的なものから概念的なものまで、あらゆる存在の境界を操ることができるのだ。

いま紫が出てきた空間の裂け目はスキマと呼ばれ、ふたつの空間の境界を操り、本来存在するはず距離を”無くした”のだ。

紫は意味もなくにやにや笑いながら霊夢の前に姿を現すと、「ごきげんよう」などと言ってきた。

霊夢は返事をするのも嫌になり、まだ僅かに湯気の立つお茶を飲んだ。

そんな霊夢の素っ気ない反応など意にも介さず、紫は霊夢に話しかけた。

「相変わらずこの神社は食料不足なのね。私が何か恵んであげましようか？」

どうして博麗神社の食料事情を知っているのか、などと聞く必要はない。

紫が現れてからも、霊夢の腹の虫は鳴り続けているのだ。紫でなくともそれなりの勘は働くというものだ。

「結構よ。あんたなんか恵まれるぐらいなら餓死したほうがましよ」

そう言い放つと、霊夢はわざとらしくそっぽを向いた。

あんまりな物言いだが、それがただの強がりだということは明白だった。

霊夢との付き合いが長い紫には、霊夢がどう言い返してくるか分かっていたのだろう。紫は霊夢の横顔を見ながらくすくすと笑っていた。

しかし、霊夢は何度繰り返したかも分からないこのやり取りに、

いい加減飽きはじめていた。

何か紫が悔しがるようなことでも言つてやりたいところだが、そんなことを言えるような状況ではないので、もっと別の方法でこのありきたりな空気を打開することにした。

「まあ、たまにはお言葉に甘えてもいいかもね」

いつも突っぱねた態度をとっているのだ、反撃には充分だろう。

どんな顔をしているのだろうか。そんな期待を抱きながら、ちらつと紫の顔を窺い見た。

だが、紫の反応は霊夢の予想の斜め上のものだった。

「嫌よ」

思わず手に持っていた湯呑を落としそうになり、慌ててそれを支えた。

まさかそんなことを言われるとは思っていなかった霊夢は、湯呑を支えた姿勢のまま紫の顔を凝視し、口をぱくぱくとさせる。

「あんたから言つてきたんでしょ」とか「じゃあなんで言つたのよ」とか、言いたいことはあるのに、口がうまく動かない。

紫を驚かすために意地を捨てて甘えた霊夢としては、紫の発言は許しがたいものだった。

「な、あんた…… どういうことよそれ！ 先に言つたのはあんただし、そ、それに、私があんたに頼みごとしてるのよ？」

どもりながらもなんとか言い返してみたが、紫は依然笑つたままこんなことを言った。

「たしかに霊夢が私にあんなことを言うのは初めてね。でもそんな霊夢はつまらないわ」

その言葉に腹が立つのを通り越して呆れ果ててしまった。

ただ、呆れたのは紫の発言にではなく、それを予想できなかった自分に対してだ。

紫が子供じみた悪戯をしたり、からかってきたのは今回だけではないのだから、そのことを考えれば容易に想像できたはずなのだ。

空腹で頭が働いていなかったと言えばそれまでだが、紫にしてや

られたという感が否めないのもまた事実である。

もはや言い返す気力すらなくなった霊夢は深くため息をついてうなだれた。

その様すら予想の範囲内だったのか、霊夢から顔は見えていないが紫が笑っているのは分かった。

「そんなに落ち込まないでよ。そうだ。久しぶりに宴会でもやりましょ。材料を持参させればタダで御馳走が食べれるわよ?」

霊夢の知り合いには宴会好きのものが多く、何かにつけて宴会を開いては、後片付けもせずに帰って行くのだ。

まともな食事にありつけるのはありがたいが、その後のことを考えると少々憂鬱になるが、いま霊夢が気になっているのは別のことだった。

「久しぶりって……宴会ならつい最近やったばかりじゃない。さすがのあいづらも集まらないんじゃない?」

ないかしら、とは続かなかった。それは考えが変わったからではない。

紫の表情に驚いてしまったからだ。

きつと霊夢は紫のこの表情を決して忘れることはないだろう。

目をボタンのように丸くして、顔を強張らせていたのだ。

突然のことですらいいのか分らず、霊夢は戸惑いながらも紫に問いかけた。

「ど、どうしたのよ? 私いま変なこと言っただかしら?」

霊夢が言葉をかけてから数瞬後、まるで突然霊夢が目の前に現れたかのように驚いてから、紫は顔を右手で覆って霊夢から目を逸らしてしまった。

いままで見たこともない紫の姿に、霊夢は動揺を隠せずにいた。改めて先ほどの会話を振り返ってみたが、やはりおかしいことは何もなかったと思う。

一体どうしたというのか。

紫はどこかを見つめたまま動かないので、霊夢はもうとつくに冷

めてしまったお茶をぐいと飲んだ。

「今日はもう帰るわ」

「え」

急に動き出したかと思うと、紫はそう言い残してスキマの中に引っ込み、間髪おかずにスキマも閉じてしまった。

ぽかんと口を開けたまま硬直していた霊夢は、スキマが完全に消えてからしばらくしてようやく正気に戻り、残っていたお茶を飲み干してこう呟いた。

「なんなのよ」

紫のことは気になるが、いつも何を考えているのか分からないし、紫の行動をいちいち気にかけていたらきりがない。

霊夢は空になった湯呑を縁側に置いて再び空を見た。

流れる雲を眺めながら、いまだに止まらぬ腹の虫の鳴き声に耳を傾ける。

まるで「なぜ紫の提案に乗らないんだ」と抗議しているかのようだった。

「宴会かぁ……」

また呟いて、霊夢は湯呑を持って室内に戻る。

「集まるかしら」

わずかに期待を込めた言葉に返事をするように、腹の虫がまた鳴ったのだった。

一章 (Part 2)

霧雨魔理沙にとって、この魔法の森は天国のような場所だった。言い過ぎかもしれないが、そう思えてしまうほど特別なのだ。

魔法使いである魔理沙は、この魔法の森に自生している茸を採取し、それを様々な方法で薬品に加工したり、直接使って何か魔法が発動するまで実験を繰り返す。

そしてその結果をすべて書き留め、自作の魔道書を作っている。ただ、それはあくまで魔理沙の場合に限る。

”本物の魔法使い”なら、そんな地道な実験などほとんどしない。そう、魔理沙は厳密には魔法使いではないのだ。

魔法使いには二種類あり、生まれながらの魔法使いと、人間が魔法使いになる者である。

前者は最初から魔法が使えるというだけで、普通の人間と変わらない。そのため、捨虫という成長を止める魔法の習得とともに、完全な魔法使いになれる。これはある種の不老不死のようなものである。

後者は修行によって魔法を習得し、捨食の魔法により食事を魔力で補えるようになって初めて魔法使いと認められる。

魔理沙は後者に当たるのだが、捨食の魔法は習得していない。いや、正確には習得するつもりがないのだ。

不老不死に興味がないわけではない。ただ、必要ないだけなのだ。たしかに魔法の修行や実験は楽しいし、死ぬまで続けていたい。だが、不老不死になってまで続けようとは思っていないのだ。

魔法の実験をしているとき、もっと時間があれば今以上の結果を出せる、という場面は何度もあった。魔法の森で茸の採取をしているとき、危険な胞子を吸い過ぎて死にかけたこともある。

人間の体は弱い。

それでも捨虫や捨食の魔法を習得しないのは、ひとつの意地があ

るからだ。

魔理沙は、人間である自分が好きなのだ。
人間という限られた時間の中で生きる自分に誇りを持っているのだ。

千年以上生き続ける妖怪や魔法使いからしたら、魔理沙の一生はあまりに短い。空中で輝いては一瞬で消える火花のようなものだろう。

そんな儚い命でも、生きている証は必ず残る。

それは徹夜して書いた魔道書であったり、死ぬ思いをしながら収集した研究材料だったり、誰かの記憶の中だったり

そういったものは、きっと、限られた時間の中で残していくからこそ輝くのだと思う。

たとえ無様な人生になろうとも、魔理沙にとっては魔道書や研究材料よりも大切な宝物になるのだ。

湿気に富んだ地面は、踏むたびに足が沈む。

周囲に生い茂る木の幹には苔が生え、独特の匂いが辺りを満たしている。

「さて、今日はこれくらいにしとくか」

採取した茸を詰め込んだ袋を持って、魔理沙は歩き出した。

木の根がいくつも飛び出ているが、魔法の森に通いなれている魔理沙はそれらを苦もなく避けていく。

普段は箒で空に飛びながら移動するのだが、魔理沙の家はこの森の中にあるし、森の中で飛ぶのは危険が多い。

「ああー、だいぶ冷えてきたなあ」

森の中はあまり風はないのだが、やはり十二月ともなると空気が冷えている。

頬を風が撫でるたびに刺すような痛みが走る。

いま鏡を見たら、間違いなく頬は赤くなっているだろう。

空いてる手に息をかけながら、魔理沙は木の根を軽快に避けながら家へと向かう。

今日は普段見かけない珍しい茸が手に入り、心なしか足が軽く感じる。

だからだろう。頬を刺すような痛みや、スカートについた苔も気にならない。

「さて、今日はどんな魔法ができるかな」

そんな独り言を呟くと、魔理沙は鼻歌交じりに歩を速めた。

結果から言えば、実験は失敗に終わった。

採取した貴重な茸を半分以上使ったにもかかわらず、新しい魔法はひとつも発現しなかった。

以前、同じ茸を採取したことがあるのだが、量が少なく、十分な実験ができなかった。

だから今回はいままでやれなかったことをやってみたのだが、その結果がこれではあまりに納得がいかない。

ただ、材料ならまだ残っているのだが、いかんせん実験器具が足りない。

「こりゃひとりじゃ無理だな」

今回の実験の結果を書き留めた魔道書を閉じ、両手を上げて背を伸ばすと、こきこきと小気味よい音がした。

長時間椅子に座り続けていたので、強張った体をほぐすのも兼ねて思いきり椅子から立ち上がった。

だが、すぐ後ろに積み上げていた魔道書に椅子がぶつかってしまった。

適当に積み上げていただけだった魔道書の塔は、案の定埃を舞い上げながら崩れ落ちた。

「っ……くそ」

魔理沙は額に手を当てながらそんな悪態をついた。実験が失敗に終わったこともあり、気づかぬうちにいらついていたらしい。

気分を落ち着かせようと机の上に置いてある湯飲みを取った。

お茶はすでに冷め切っていたが、今はこの冷たさが丁度いいかもしれない。

ぐいと中身を飲み干し、机の上に湯飲みを置いた。

崩れてしまった魔道書を積みなおし、魔理沙は壁にかけてあった帽子を取った。

帽子はつばが大きく装飾品の少ない、これぞ魔法使いと呼べるような典型的なものだ。

魔理沙はいざという時、中に物を詰め込んで運ぶことができるこの帽子を気に入っている。

帽子を被り、残りの茸が入った袋とマフラーを持って、他の積み上げられた魔道書を避けながら扉まで進む。

「さて、やっぱり行くならあそこしかないよな」

魔理沙は扉の横に立ってかけてある簾を手に取り、家を出た。

外はすっかり暗くなり、森の中はまるで全てを飲み込んでしまいたいような闇を湛えている。

普段から通いなれているとはいえ、こんなところを通るのはあまりに危険だろう。

だから、今回は徒歩とは別の方法で移動する。

魔理沙は玄関の前でマフラーを首に巻いて、簾にまたがり宙に浮いた。

森の中を簾で飛んで移動するのは危険だが、森を越えていく分には問題ない。

空を飛ぶとなると、森の中より遥かに冷える。

簾の柄をしっかりと握り、森の少し上辺りを飛ぶ。

空は高いところに行けば行くほど空気は冷たくなる。だから極力

低空で飛ぶ必要があるのだ。

目的地は魔法の森の中 ” 本物の魔法使い ” が住む洋館である。その魔法使いは魔理沙の知り合いで、これまでも魔法の実験で何回か手伝ってもらっている。

「あいつ居るかなあ……居なけりや勝手に借りてくか」

雲ひとつない夜空に浮かぶ満月が、神秘的な光で魔理沙を照らし出していた。

魔法の森の一角、そこだけ木の生えていないところがある。

知り合いの魔法使いが住む洋館はそこに建っていた。

立派などとは言いがたいが、汚れひとつなく清楚さと気品さを漂わせている外見は、この魔法の森には不釣り合いなほどに綺麗だ。

魔法で保護しているのか、それともこまめに掃除しているのか。おそらくは前者だろう。いくら小さいとはいえ、汚れるたびにいちいち掃除していたらきりが無い。

魔理沙は簾から飛び降りる形で着地すると、洋館の扉をノックした。

こんこんと木製の扉特有の音が静かな森に響く。

「おーい、居るかー」

返事はない。

ただ、人が居ないわけでもない。

魔法使いである魔理沙は、近くに強い魔力があれば探知できる。

そして、洋館の中にはかすかだが魔力を感じる。

かすかに感じるだけなのは、魔法を使っていない時は無駄な魔力が漏れ出さないようにしているからだ。

ただ、不思議なのはもうひとつ強い力を感じることだ。

しかもそれは魔力とは違う、妖怪の持つ特殊な力 妖力なのだ。それも隠し切れないほど強大な。

ここに自分以外の客人が来るのは珍しいことなので一瞬と惑ったが、落ち着いてみれば、それは魔理沙がよく知るものだという事はすぐに分かった。

もう一度ノックしようかと思ったが、先ほどのノックが聞こえていないはずがないだろうと思い、魔理沙は躊躇なく洋館の扉を開けた。

洋館の外見とは違い、リビングにはアンティークの類はほとんどなく、質素な家具がいくつか置いてある程度だ。

部屋の中央には丸型のテーブルがあり、それを挟む形で椅子が二脚並べてある。

魔理沙はここに来るたび、薦められてもいないのにその椅子に座ってはお茶をたかったりしている。

しかしその椅子も、いまはなんの意味もなしていなかった。

洋館の主とその客人は椅子に座らず、なぜか部屋の奥に立っていたのだ。

二人は返事もしていないのに魔理沙が入ってきたことに何の驚きもせず、ただ一瞥するだけですぐに顔を見合わせていた。

魔理沙は少しむっとしたが表には出さず、箒を扉の横に立てかけてから二人に近づいた。

「よおアリス。それと珍しいな、紫がここにいるなんて」

そう言って魔理沙は右手を少し上げて挨拶の代わりにした。

洋館の主　アリス・マーガトロイドは再び魔理沙を見ると、目だけをこちらに向けて隣で魔理沙を横目で見ている紫に何事か呟いた。

ただ、魔理沙にはアリスの口の動きが見えただけで、声は一切聞こえていなかった。

おそらく魔法で魔理沙に聞こえないようにしているのだろう。

何を話していたのか気になったが、それ以上に気がかりなのは二人の態度だ。

あきらかにこちらを警戒している。

今度こそ魔理沙は眉を顰めたが、すぐに自分の勘違いに気が付いた。

さっきは二人が魔理沙を警戒しているとばかり思っていたが、そうではない。

二人の目は少し困ったような色を帯びていたのだ。

「なんだよ。どうかしたのか？」

「いえ、ちよつと宴会の話をしてたのよ」

口元を少しだけ笑みの形にしながらアリスが答えた。

「宴会の話？　ならなんで私に聞こえないようにするんだよ」

「紫と二人だけで企画してたのよ」

そう言つてアリスは紫の顔を見た。紫はわずかに目を見開くと、すぐにいつもの胡散臭そうな笑みを浮かべながら「ええ」と言いながら頷いた。

だが、アリスの発言が嘘であることくらい魔理沙にだつて分かる。しかし今それを問うたところで、満足のいく答えを得られるとは思えない。それに深追ひしてアリスの機嫌を失えば、わざわざここに来た意味がなくなってしまう。

アリスと紫の態度や発言は気になるが、今は棚に上げておくことにする。

「……そうか、とりあえず明日はやめてくれよ。ちよつとやりたいことがあるんだ」

自宅を出るときからずっと持ち続けていた袋を持ち上げながら言つた。

アリスと紫はきょとんとした顔をしたが、アリスはすぐに合点がいったらしい。

「ああ、実験の手伝いを頼みに来たのね」

アリスには何度か魔法の実験で世話になっている。

魔理沙が見せた袋を一目見ただけで、魔理沙がこんな時間に訪ねてきた理由に気づいたようだ。

二人のやり取りを見て、紫もようやく事情が飲み込めたらしい。

一步下がると「邪魔者は帰るとするわ」とだけ言い残すと、懷から扇を取り出し、閉じたままのそれで空間を切り裂くような動きをしてスキマを作ると、アリスと魔理沙の返事も待たずスキマの中へと入っていった。

スキマが閉じるとほぼ同時にアリスがこちらへ歩いてきた。

「さて、今日はどんな実験を手伝わせるのかしら？」

肩まで伸びたアリスの金髪が揺れる。

アリスの髪は同じ金髪である魔理沙も羨ましくなるほど綺麗で、肌の薄さも相まって人形のようにも見える。もともとアリスのことは美人だと思っているが、夜の暗さの中で見ると、普段とは違う妖艶さを醸し出しているように感じる。

ただ、魔理沙の返事が遅れたのはそんなアリスに見惚れていたからではない。

さっきまで魔理沙に対して不自然な視線を向けていたにもかかわらず、今はもう魔理沙の見慣れた笑顔を見せてきたので、思わず面食らってしまったのだ。

「あ……と、珍しい茸が手に入ったんだけど、私一人じゃ限界があるらしい」

「そう。私にできることならいくらでも手伝ってあげるわ」

魔法使いは魔法の実験やその結果を他人に見せない。

それは偏屈だからというわけではなく、安易に見せてはならないことがいくつもあるからだ。

魔法というのは全てが人助けのためにあるわけではない。

魔法の種類は無数にあり、その中には傷を癒すものから、容易く人を殺せるようなものもある。

そして、誰にも知られてはならないようなものも……

だから他の魔法使いの実験を見れるというのは貴重なことであり、新たな魔法が発見できれば自分もその魔法を習得することができるのだ。

アリスは快諾し、魔理沙を奥の部屋へと案内する。

そこは魔法の実験を行うため特別に設けられたもので、魔理沙も何回か入ったことがある。

アリスは部屋の扉を開け、魔理沙を先に入るよう促す。

魔理沙は茸の入った袋を肩から提げ、アリスの横を通り部屋の中に入った。

部屋の中には木製の棚がいくつかあり、無数の薬品や実験素材が瓶に詰められた状態で整然と並べられている。

瓶にはひとつずつラベルが貼られ、中身が一目で判別できるようになっている。

魔理沙はこの部屋を見るたびに自分の家と比べてしまう。

初めてこの部屋を見たときは、呆然を通り越して苦笑いを浮かべてしまったものだ。

魔理沙が魔道書などが並べられた机に袋を置くのと同時に、アリスが部屋の扉を閉めながら中に入ってきた。

「さて、はじめましょうか」

手をぱんと打ち鳴らし、アリスは魔理沙の隣に立った。

「そうだな」

それに応えるように、魔理沙は袋の中から茸をいくつか取り出した。

一章 (Part 3)

博麗神社の裏には大きな湖がある。

周囲は森で囲まれており、日中は霧で覆われていて視界が非常に悪く、霧の湖とも呼ばれている。

この湖には多くの妖精や妖怪が集まるため人間はほとんど寄り付かず、幻想郷の中でも比較的危険な場所に当たる。

ただ、その湖には妖精や妖怪すら集まらない場所がある。

湖の畔に建つ洋館　　紅魔館である。

名前のとおり真っ赤なレンガを使用したひととき異彩を放つデザインの洋館なのだ。また、廊下には窓が少なく、日の出ている間はカーテンで閉め切られているので不気味な雰囲気を放っている。

それというのも、紅魔館の主が日光を嫌っているからである。

嫌っているといっても、ただ眩しいのが苦手ということではない。日光を浴びることができないのだ。

その人物は妖怪の中でもトップクラスの力を持ち、多くの妖怪が畏れ決して逆らうことのない存在、吸血鬼なのだ。

吸血鬼は日の光を浴びると蒸発してしまうため、紅魔館の廊下や部屋の窓はすべて閉め切られているし、吸血鬼の危険性を知っている妖怪たちは滅多なことでは紅魔館に近づかない。

その吸血鬼は圧倒的な力を揮い、妖精のメイド達を使役してほとんどの雑用を任せている。が、妖精たちは基本的に自分勝手な性格をしているので、メイドとしての仕事はほとんどできず、まるで役に立っていないというのが現実である。

それでも役に立たないメイド達を雇っているのは、それを従え、見事な采配で仕事をこなさせているメイド長がいるからだ。

吸血鬼も彼女の仕事ぶりと従順さを気に入っており、身の回りの世話はすべてそのメイド長に任せている。

吸血鬼に従える優秀なメイド長。そんな話を聞けば、さぞかし強

い妖怪なのだろうと思うところだが、そのメイド長は妖怪でも妖精でもない　ただの人間なのだ。

ただの人間といっても、吸血鬼がごく普通の人間を雇うはずがない。

幻想郷に住む妖怪たちは何かしら特殊な能力を持っているのだが、彼女のそれはその中でもかなり稀有な能力なのだ。

吸血鬼はその能力と優秀さから彼女をメイド長とした。

彼女も主へ絶対の忠誠を誓っており、日々メイド長としての業務を完璧にこなしていた。

「……ふう」

メイド長である十六夜咲夜は、館のモップがけを終わらせ一息ついていた。

ただでさえ紅魔館は広く、気が遠くなりそうなほど部屋があるというのに、他のメイド達はまるで役に立たないのでほとんど咲夜ひとりで仕事をこなさなければならないのだ。溜息のひとつぐらいつきたくなる。

妖精のメイド達に下手な指示を出せば仕事が増えるだけなので、今は失敗されても被害の少なくてすむ庭園の掃除を任せている。

もつとも今は”誰も動いていない”の다가。

いや、正確に言えば、”この世界が動いていない”の다。

風は吹かず、木々は揺れず、日は沈まず、音は響かない。咲夜以外のものはすべて凍りついたかのように動かないのだ。

これが咲夜の持つ絶対的な能力　『時間を操る程度の能力』である。

時間を加速や遅延、停止させることができるこの能力を使い、咲夜は広すぎる紅魔館の掃除をまったく時間をかけずに終わらせることができるのだ。もちろん咲夜自身は疲労するのだが、時間を止め

ていた分自由な時間も増えるし、休憩もでき、他のメイド達の様子を窺うことができる。そもそも時間を止めなければこの洋館の掃除を終わらせることなどできるはずがない。

「さて、そろそろいいかしら」

咲夜は能力を止め、時の流れを元に戻した。

瞬間、いままで止まっていたすべてのものが生き返ったかのように動き出した。吹き抜けるか風が木々の間を吹き抜けるたびに枝葉が揺れ、かさかさとした音を立てる。この世界に存在するものは時間が止められていることに気づかず、その間の記憶も存在しない。それはまさに咲夜だけの世界と言えるだろう。

咲夜は肩に手をあてると、首を左右に捻った。

時間を止めている間は埃が舞わないので掃除が楽なのだが、長時間の能力の使用はさすがに疲れる。もともと、時間が止められているというのに長時間と表現するのもおかしい話ではあるのだが。

とりあえず午前中にやるべきことは終わったので、咲夜はモップをしまつてから自室へと向かった。

かつかつとヒールの音が廊下に響く。咲夜以外に誰もいない廊下は、まるで時間が止まっているかのように静かだ。

少しサボってみようか。ふとそんなくならないことを考えてしまった。仕事がないのなら、いつ主人に呼び出されてもいいように自室で待機していなければならぬのだが、周りに誰もいないとなるとそういうことも考えてみたくなるものだ。

吸血鬼は夜行性なのでこの時間に起きてくることはないだろう。

他のメイド達は外にいるのだから、誰かに見られるということはないだろう。

「……誰もいないわよね」

もう一度だけ辺りに誰もいないことを確認してから、窓に近づいてカーテンを開けた。

差し込む光が廊下にあふれる。

いままで薄暗い廊下において光になれていなかったのも、その光は

咲夜には少し眩しかった。

瞼を半分だけ閉じ、手のひらを目の上に当てた。

目が光に慣れたところにふと下を見ると、庭園でメイド達が箒を剣のように振り回して遊んでいるのが二階からでもはっきりと見てとれた。その周りに落ち葉が散らばっているのも見えるので、落ち葉を集めてから遊び始め、それを踏み散らかしたところだろうか。

「はあ」

思わず溜息が出ていた。

このままでは自分が尻拭いをしないといけなくなる。

咲夜はカーテンを閉めてから窓を離れ、階段へと向かおうと左へ振り向き

「おはよう、咲夜」

一瞬、頭が真っ白になったが、身体は無意識のうちにいつもそうしているように動いてくれた。

「おはようございます。お嬢様」

目の前には齡十にも満たぬであろう少女が立っていた。

しかし、普通の少女とは少し違っていた。

まず目が留まるのは背中に生えた巨大な翼だ。へたをすれば少女の身体より大きいかもしれないその翼は、蝙蝠ほっふうを彷彿とさせる形をしている。さらに、目は血のように紅く、それでいて獰猛な肉食獣のような冷たさを孕んでいる。

あまりに異様な姿をしたこの少女は、その実、500年以上生きた吸血鬼であり、この紅魔館の主なのだ。

「珍しいですね、こんな時間に起きられるなんて」
努めて平静を装ってそう言った。

吸血鬼の少女、レミリア・スカーレットは返事をするわけでもなく、まだ眠たそうに目をこすった。

吸血鬼は日が沈むの頃に起床し、日の出前に寝るのだ。だが今はまだ10時を過ぎたばかりで、レミリアが眠りについてから数時間

しか経っていない。

レミリアは気だるげに背伸びをしてから大きく息は吐いた。次に顔を上げたときにはもう眠たそうな少女の顔ではなく、紅魔館の主にふさわしい吸血鬼の顔になっていた。

「なんだか胸騒ぎがするのよ」

「胸騒ぎですか？」

「そう。昨日の夜から感じてただけだね。最初は気のせいだと思っただけど、今日も感じるとなると……なにかあるかもしれないわね」レミリアはそう言うのと、顎に手を当てた。

咲夜自身は特になにも感じていないのでなんとも言えないが、自分の主が真剣な顔でそう言っているのに真っ向から反論できるはずがない。

「それは紅魔館こまかに関係することなんでしょうか？」

「漠然としたものだからねえ……とりあえず気をつけておいて。私は念のために起きてるから。それと門番にも伝えておいて」

それだけ言い残すと、レミリアは踵を返し自室へと歩いていった。咲夜は「かしこまりました」と言ってから軽くお辞儀をして、レミリアが見えなくなるまで見送った。

「胸騒ぎねえ」

先ほど閉めたカーテンを見ながらぼつりと呟いた。

レミリアの言う胸騒ぎとは違うのだが、『門番』という言葉聞いたときから嫌な予感ならしている。

もう一度窓に近づいてカーテンを開け、遠くに見える正門に視線を向けた。

「やっぱり」

門の前には侵入者を防ぐために門番がいるのだが、その門番は必要以上に頭を垂れているのだ。それは客人に対するお辞儀とは明らかに違った。

空を見れば、青の絵の具で塗りたくったような心地よいほどの快晴。

まさに昼寝日和である。

冬の風は冷たかったが、雲ひとつない空から注ぐ日の光がそれを紛らわしてくれる。

かさかさと舞う落ち葉の音が子守唄のように耳をくすぐる。

後ろのほうで妖精のメイド達が騒いでいるが、その声すら子守唄の一部になりつつある。

こんなにも気持ちがいいのだから、少しぐらい昼寝しないと損というものだ。

なにしろ門番というのは立っている以外、特に仕事がないのだ。侵入者が来ればそれなりに忙しくなるのだが、最近ではその侵入者すらいなくなってしまった。いや、いるにはいるのだがあまりにすばしっこく、捕まえることができないのだ。その度にメイド長に叱られてしまうのだが、それにも慣れてしまった。

どれほどの時間が経っただろうか。いつの間にか妖精たちの声が聞こえなくなっている。その代わりに足音がこちらに近づいて

「おはよう、美鈴」

「！」

背中越しに声をかけられ、紅美鈴ほんめいりんは飛び起きた。

いままで夢うつつでいた美鈴は突如現実の世界に引きずり出され、慌てて振り向くと真後ろに立っていたメイド長を見て姿勢を正した。

「お、おはようございます……咲夜さん」

美鈴にぴったりとくつついて立っていたのだろ。頭ひとつ小さい咲夜を見下ろす形になった。

「ずいぶんと気持ちよさそうに寝てたじゃない」

いまの空模様と同じぐらい晴れやかな笑顔で言ってるのに、美鈴の背筋には冷や汗が浮かんでいた。なまじ美人だけあって異様な凄みがあるのだ。

美鈴は引きつった笑みを浮かべながら、無様な言い訳を取り繕った。

「いやゝいい天気ですね！　こういう日は咲夜さんも一緒に　」
いつの間にか咲夜の右手には一本のナイフが握られていた。ナイフ使いらしい手際の良さではあるが、いったいどこから取り出したのか。もしかしたら紅魔館の敷地内の至る所にナイフを隠していて、時間を止めてからそれを持ってきているのだろうか。

これ以上の抵抗は無駄だと悟った美鈴は、呆れ顔でこちらを睨んでいる咲夜に先ほどとは違った意味で頭を垂れた。

「すみませんでした。やっぱり刺激がないと眠くなってしまうって…

…」

「まったく……とにかく昼寝もほどにしなさいよ！　それとお嬢様から伝言があるわ」

呆れ顔から一変して真面目な顔になった咲夜を見て、美鈴も門番にふさわしい表情になる。

「お嬢様がなにか胸騒ぎがすると言っていたわ。まだ漠然としていて、ここに關係することかどうかは分からないけど、とりあえず警戒しておいて。異変を感じたらすぐに連絡すること」

「了解しました」

美鈴の返事に満足したのか、咲夜は一度だけ頷くと屋敷へと戻っていった。

見れば、いままで騒いでたメイド達が真面目に仕事をしている。

ここに来る前にメイド達を叱っていたらしい。咲夜が現れる前に静かになったのはそのせいだろう。

「ふわあゝ」

そんな間抜けなあくびが出たのは、咲夜の背中が小さくなってからだ。

緊張が解けたせいとか、また眠気が襲ってきたのだ。

そもそも警戒しろと言われても、いったい何に警戒しろというのか。変わったところなどないし、どこを見ても平和の一言で片付け

られてしまう。

美鈴はもう一度あくびをして、振り向いた。

「痛っ！」

後頭部に突き刺すような痛みが走ったのはその時だった。

何事かと痛みのするところを触ってみれば、本当に一本のナイフが突き刺さっていた。

なるほど、眠気を覚ますにはちょうどいい刺激だった。

一章 (Part 4)

紅魔館の地下には巨大な図書館がある。そこには貴重な文献や魔道書が収められた本棚が数多く存在しており、その量は膨大で、図書館の本をすべて読めば知らないことなどないと言っても、過言ではなくなるかもしれない。が、勿論そんなことをしようものなら何百年もかかることは間違いない。なにせ解読が困難な本がいくつもあるうえに、それを解読するために必要な文献すらすでに使われていない言語で書かれていることがままあるのだ。普通の人間では いや、千年も生きられる妖怪でも諦めてしまっただろう。

しかも広大な図書館の中に無数の本棚が規則正しく並べられた光景は、さながら地下の迷宮に迷い込んでしまったかのような錯覚に陥ってしまうだろう。

しかし、そんな図書館に住み着き、あまつさえ全ての本を読み解こうとする変わり者がひとりいる。

その変わり者にして生粋の魔法使いであるパチュリー・ノーレッジは、捨虫の魔法のおかげで年を取ることがないし、『本の傍に在る者こそ自分』と考えているほど本を読むこと以上に素晴らしいことはないと思っており、図書館の本をすべて読むという偉業を成し遂げるにはもってこいの人物なのだ。

古びた本特有の匂いが充満する地下の図書館で、パチュリーは魔法の研究に勤しんでいた。

机の上には解読中の魔道書が広げられ、その周りには参考にするための文献がいくつも置かれている。どれもページの端はボロボロで、表紙に書かれていたタイトルであろう文字はかすれてほとんど読めない。もはや化石じみたその本は、中身を読まない又何の本かわからなくなっていた。そんな状態であるため、必要な本をこの図書館から見つけ出すのは至難の業で、パチュリーもどこに何の本があ

るのかほとんど把握できていないのだ。

そのためパチュリーは本の管理をすべてひとりの司書に任せている。

小悪魔と呼ばれるその司書は図書館のどこに何の本があるのかを把握しており、パチュリーはほしい本はいつも持ってきてもらっている。のだが、本を読むことだけに集中したいパチュリーは、その他の雑用もすべて小悪魔に任せており、パチュリーの使い魔である小悪魔も、どんな要求にも文句を言わずしたがっている。

ただ、パチュリーにはひとつだけ文句というか、小悪魔に改善してほしいことがあった。

「……ふう」

ティーカップの紅茶を一口飲み、小さく息を吐いた。

ただしそれは、朝の晴れやかな気分で始めた大好きな読書に、紅茶というアクセントを加えられた至福に対してではない。むしろいままでの至福を邪魔された、という感さえある。

小悪魔に対する改善してほしいところというのはこのことだ。

紅茶の味が薄いのだ。

原因はいくつかあるだろうが、大体の予想はつく。

紅茶がぬる過ぎるの。時間が経って冷めてしまったというのもあるが、それにしてもぬるい。

大方火傷しないように気をつかったつもりなのだろうが、それでは茶葉から十分に成分が抽出されず風味の薄い紅茶になってしまっているのだ。紅茶を淹れるなら沸騰直後の熱湯でなければならないというのに……

正しい淹れ方を教えようか。そんなことを思っただけなら何度もあったのだ。しかし全ての雑用を小悪魔ひとりにやらせておきながら、紅茶の淹れ方ひとつに文句をつけるのは如何なものだろう。そもそもこういう時に主人としての器が試されるのではないだろうか。むしろ使い魔のミスを責めず受け入れることこそ、主人としてのあるべき態度なはず

だ。

何度目かの言い訳を頭の中で巡らしていると、件の小悪魔が分厚い古びた本をいくつか積み重ねて持ってきた。

「パチュリー様、別の本を持ってきました」

言って、小悪魔は机の上に持ってきた本を重ねたまま置いた。

できることなら本が傷まないように重ねず置いてほしかったが、結局、パチュリーは何も言わずに頷くだけにした。

新しく本を持ってきてもらったことで机の上が狭くなってきたので、パチュリーは読み終えた本を小悪魔に渡そうと机の隅に置かれたそれを持ち上げたとき、すでに振り返っていた小悪魔の背中越しに見慣れた人影が見えた。

いや、人影と呼ぶにはそれはあまりに歪だった。なにしろ背丈はパチュリーより頭ひとつ分以上低いというのに、広げればそんな身長より大きくなるであろう翼が生えているのだ。

「レミイ？」

それはパチュリーの友人、レミアだった。

紅魔館の主を前にした小悪魔は畏^{かしこ}まって「おはようございます」と挨拶すると、そそくさとその場を離れてしまった。

パチュリーが友人と二人きりになれるよう気を利かせたつもりなのだろうが、読み終えた本を持っていつてほしかったパチュリーは、結局、本を元の位置に戻すことになってしまった。

「あ、レミア様も紅茶をお飲みになられますか？」

立ち去ろうとした小悪魔が振り返りながらそう言った。

それを聞いたパチュリーは少し考えてしまった。レミアは普段から咲夜の淹れた最高の紅茶を飲みなれている。それに対して小悪魔の紅茶はお世辞にも美味しいとは言い難い。正直、小悪魔の名誉のためにもここは別のものを持つてくるように言ったほうがいいのだろうか。

頭の中であれこれ考えているうちに、レミアが手を上げて小悪魔を制していた。

「さつき飲んできたばかりだからいい。その代わり机の上を少し片付けてもらえないか？」

小悪魔は「はい」と言ってからパチュリーのもとへと戻り、パチュリーが机の隅に置いた本を持って本棚の迷宮へと向かっていった。小悪魔の紅茶を断りながら読み終えた本も片付けさせてしまったレミリアを見て、まったくすばらしい観察眼と決断力だなと思った。おそらく先ほどのパチュリーと小悪魔とのやりとりを見ていたのだろう。もしかしたら小悪魔の紅茶のことも誰かに聞いていたのかもしれない。

レミリアはパチュリーの対面の椅子に座った。

「パチエ、一度あの子に紅茶の美味しい淹れ方を教えてあげなさい」予想は的中した。

パチュリーは苦笑いを浮かべながら本にしおりを挟んで閉じた。

「まあそのうちね。で、どうしたのよこんな時間に。なにかあったの？」

パチュリーは顔についた汚れを拭くかのように手で表情を消すと、今度は眉を顰^{ひそ}めながら言った。吸血鬼であるレミリアがこんな時間にかかるのは珍しく、こういう時は大抵なにか面倒なことが起こる前兆と決まっているのだ。

面倒なことというのは、幻想郷を巻き込むような異変からレミリアの気まぐれなど様々であるが、ほとんどが後者である。

だから今回もそうなのだろうと高を括っていたのだが、どうやらそうではないらしい。

パチュリーに問われたレミリアはいつになく険しい表情を浮かべていたのだ。

それがパチュリーの態度に対するものではないことはすぐに分かった。

レミリアの目が、何かに恐れているようなのだ。
「ちよっと、どうしたの？」

もう一度問いかけたところで、パチュリーは自分の思い違いに気

がついた。

なにかに不安を抱いている？

レミリアはパチュリーの問いにどう答えたらいいのか分からないのか、手元や本棚を見たりと視線が定まっていけない。もしかしたら自分がなぜ不安になっているか分からず、困惑しているのかもしれない。視線が定まらないのは明確な答えを見つけれないからなのだろう。

「ちょっと聞きたいことがあるのよ」

レミリアがそう口にしたのは、パチュリーが冷め切った紅茶を飲もうとカップに手を伸ばそうとしたときだった。

「なによ改まって」

カップへと伸ばした手を戻し、机に肘をついて組んだ手に顎を乗せながらそう言った。

紅魔館の主に対してこんな態度が取れるのは、パチュリーがレミリアにとってただの友人ではなく、相談役のような立場にあるからだ。

レミリアはたまに他人には言えないような悩みを抱えることがある。しかし、主人が従者たちに情けない姿を見せるわけにはいかずひとりで抱え込むことがあるので、時々パチュリーがそれを解消してやるのだ。

「ほら話してみなさい。いまさら隠し事なんてするような仲じゃないでしょ？」

いまだに口ごもっている友人に対して、パチュリーは諭すように言っただけだ。

するとレミリアは観念したかのように大きく溜息をついた。

「はあ、それもそうね。単刀直入に聞くけど、最近なにか変わったことはなかった？」

突拍子もない質問だったので面食らいながらも、口元に手を当てながら思索したが、特に思い当たる節はなかった。

「さあ、特になにも無いわね。それにこういうことはレミィの方が

敏感なんだから、レミイがわからないことは私にも分からないわ」
そう言つと、レミリアはまた視線をパチュリーから外そうとして、
だが、すぐにパチュリーの顔に視線を戻した。ひとりでもど
うにもならないと分かったのだらう。

「昨日の夕方から妙な胸騒ぎを感じているの」

「胸騒ぎ？」

「ええ。私が起きたのがその時間帯だからそれ以前のことはわから
ないけど、その時からずっと感じているわ」

吸血鬼でありながらこんな時間に起きてきたのはそれが原因らし
い。

レミリアは鼻から息を長く吐き、椅子の背もたれに身体を預けて
腕を組んだ。容姿が幼いので、ともすれば子供が威張っているよう
にも見えてしまう。

「その胸騒ぎとやらの原因は……その様子だと見当すらつかないみ
たいね」

「こんなのは初めてよ。自分が何を感じているのかも分からないの
に、近くで自分や他の誰かに関わるような異変が起きているかもし
れない　とてもじゃないけど耐えられないわ」

先ほどレミリアの表情を怯えているようだと思えたのはあながち
間違いではなかったらしい。

それにしても、ここまで落ち着きのないレミリアを見たのは初め
てだ。

今も組んだ腕を指で何度も叩いているし、眉間のしわは一向に消
える気配がない。

もしかしたら自分が考えているより事態は良くないのかもしれない。
い。

「しかたないわね」

気だるげに言いながら立ち上がり、パチュリーは頭をぱりぱりと
掻いた。

目の前で友人にこんな顔をされていたのではこちらまで落ち着か

なくなるというものだ。

「とりあえず紅魔館の周辺を調べておくわ。だからもう少し紅魔館の主らしい顔をしなさい」

パチュリーはきよとした顔のレミリアに溜息交じりの笑顔を
見せながらそう言つと、小悪魔を呼びつけて必要な魔道書を持つて
くるように指示した。

誰だつて、困っている友人を目の前にしたら手を差し伸べずには
いられないだろう。

「悪いわね」

「そう思うなら自分だけで解決してほしいものだわ」

「パチエはもう少し外に出たほうが良いと思うのだけれど」

その言葉にはさすがのパチュリーも目を見開いた。

この吸血鬼は助けを求めておきながら、友人の運動不足解消のた
めだと言つのか。

レミリアはにやにやといやらしい笑みを浮かべながらパチュリー
の顔を見ていた。

まったく、この吸血鬼はあと何百年生きたらこの幼稚さが無くな
るのだろうか。

パチュリーはレミリアの冗談に乗つてやることにした。

「ならあなたも一緒に行く？ いまは絶好の散歩日和よ？」

今度はレミリアが言葉を失い、そして、次の瞬間にはどちらから
ともなく笑いあつていた。

小悪魔の「パチュリー様」と呼ぶ声が聞こえたのはそんなときだ
つた。

「準備も出来たし、行ってくるわ」

「ありがと」

なにをいまさらという顔をして、パチュリーは小悪魔から魔道書
を受け取つて図書館を後にした。

一章 (Part 5)

魔理沙が目を覚ましたのは、洋館の雰囲気にとつたりの上品なソファの上だった。

昨夜は結局深夜まで実験を続けていた。想像以上に良い結果が出たので、二人して子供のようにはしゃぎながら時間を忘れて没頭してしまった末、疲れ果てた魔理沙はソファに倒れこむようにして寝てしまったのだ。

いつの間にかかけてあった毛布をどかして起き上がると、カーテンの開けられた窓から差し込む光に一瞬目がくらみ、目の上に手のひらを当てた。

外の明るさからすると、目覚めるにはいささか遅かったかもしれない。

「……ん、いま何時だ？」

半分閉じたままの瞼を擦りながら辺りを見渡して時計を探した。

「もうすぐ10時よ」

魔理沙が目当ての時計を見つけると同時に聞こえた声の主は、綺麗な装飾の施されたトレイに二人分の紅茶を乗せて運んできているところだった。

ソファに座っていないながらも紅茶の甘い香りが伝わってくる。それは寝ぼけ眼だった魔理沙を覚醒させるには十分だった。

「ふああ。良い匂いだな」

「ダーズリンよ。ほら、女の子なんだからもう少し身だしなみに気をつかいなさいよ」

あくび混じりで言った魔理沙に対して、アリスはトレイを机の上に置いてから用意してあったであろう鏡と櫛を差し出してきた。魔理沙はそれを受け取りはしたが、鏡は見ないで適当に髪を梳く程度にしておいた。これから誰かに会うわけでもないし、寝癖なんて家に帰ってからゆっくり直せばいい。なにより、紅茶が冷めてしまう

ではないか。

そんな魔理沙の様子を椅子に座って紅茶を飲みながら眺めていたアリスは、呆れたようにうなだれていた。魔理沙は「まあまあ」と言いながら空いている椅子に座った。

たしかにアリスは普段から身だしなみには気をつけている節がある。もし初めて会ったときに貴族のお嬢様ですなどと言われれば信じてしまうだろう。いや、今朝も魔理沙より先に起きて紅茶まで準備しているあたり、貴族のお嬢様というより貴族に仕える使用人のほうがつくりくるかもしれない。

とにかく友人と二人きりの時ぐらいは楽にしていると思うのだ。そもそもそんなに身だしなみに気をつかったところで、一体何の得があるというのだろうか。別に見せる相手がいるわけでもないだろうに　まさか、アリスには相手がいるのだろうか。もしかして知らないうちに人里で……

頭の中であれこれと妄想を膨らせながら無意識に紅茶を飲んで、魔理沙はようやく我に返った。

「……おいしい」

「でしょ？　昨日の実験がうまくいったから、お祝いとまでは言わないけどちょっと奮発してとっておきの……ちよっと、聞いているの？」

「え、ああ……うん」

魔理沙が心ここにあらずだったのはアリスの説明を聞くのが面倒だったからではない。楽しそうに笑いながら話しているアリスを見ていたら、先ほどの自分が馬鹿らしく思ってしまったからだ。

カップの中を覗き込んで、魔理沙は自嘲気味に笑った。

薄いオレンジ色の紅茶に映る顔の、なんと情けないことか。

「魔理沙？」

覗き込むようにしてこちらの顔色を窺ってきたアリスに、魔理沙は「なんでもない」と言って、紅茶の残りを飲み干した。口の中いっぱいに紅茶の風味が広がり、少しむせてしまった。アリスはまた

もや呆れてうなだれてしまった。

魔理沙はけけほと咳き込みながら、訝しげにこちらを見てくるアリスから目を逸らした。

声には出していないが、あきらかに魔理沙の挙動を不審に思っているのが顔を見なくても雰囲気だけでわかった。

「き、気にすんな！　ところで宴会の話はどうなったんだ？」

いまの空気に耐えられず無理に話題を変えてみたのだが、これが妙なことになってしまった。

先ほどまで魔理沙の顔を訝しげに見ていたアリスの目が一瞬だが眉根を寄せたように見えたと思ったら、次の瞬間には人形のように無表情な少女がそこにいた。

突然のことで魔理沙が困惑していると、アリスは何事も無かったかのように、だが、取り繕ったのがわかり過ぎるほどにわかる不自然な笑みを浮かべた。

「ええ、順調に進んでるわよ」

昨夜のアリスと紫のやり取りを思い出した。

あのとき二人は魔法を使って魔理沙に声が聞こえないようにしていた。どうしてそんなことをしたのかはわからないが、今のアリスの態度を見ればなにか知られてはならない、それも魔理沙にとって好ましくない話だったのは歴然である。そもそも宴会の話だったのかすら怪しい。アリスと紫が一緒にいたこと自体珍しいというのに、普段は誘われる側のアリスが宴会の企画者側に立つなど初めてではないだろうか。

何を隠しているのか気になるが、もう少し様子を見てから訊くことにしようと思い、魔理沙はできるだけ動揺を隠しながら話を続けた。

「……そうか、そういえば宴会なんて久しぶりだな」

魔理沙自身もそうなのだが、周りの友人たちが揃って宴会好きなのでことあるごとに宴会を開いており、今の時期だと雪が降るたびに皆で集まって雪見酒に興じるのだ。

だが最近は肝心の雪が降っていないので、一ヶ月ほど宴会は開かれていない。もっとも、一ヶ月で久しぶりだと感じるのは魔理沙だけの感覚なのだろうが。

「アリス？」

魔理沙は空だというのを忘れてカップを持ち上げようとしてしまい、一気に飲むんじゃなかったと後悔しながら顔を上げて、ようやくアリスの異変に気づいた。

アリスは魔理沙の呼びかけにも応えず、愕然とした表情のまま、ぜんまいの切れた人形のようにぴたりと動かなくなってしまうていたのだ。

これにはさすがの魔理沙も無視できなかった。

「おい、どうしたんだよ！ おまえさっきからおかしいぞ？」

魔理沙がそう言っていると、アリスは小さく「あっ」と言ってから顔を手で覆いながら背けた。

その横顔からは、汗が頬を伝って落ちていくのと眉間に見たことも無いほどしわを寄せているのが見て取れた。

いかなる時でも冷静さを崩さないアリスがここまで平静を欠くなど、もはやただ事ではない。

ただ、今の会話の中のどこにアリスがこうなる要素があったというのか。

昨晚の紫とのやり取りに始まり、今のアリスの反応はすでに魔理沙ではどうしようもないほどの当惑をもたらしていた。

「今日は……」

先に沈黙を破ったのはアリスだった。

「今日は、もう帰ってくれないかしら」

だが、発せられた言葉は、魔理沙の意とは異なるものだった。顔を背けたままのアリスの横顔から見える目に魔理沙が映っていないのは明白だった。

もう何を訊いても無駄だろう。

それはいままでの経験だとか、アリスの性格を考えてのものでは

なく、直感がそう告げているのだ。

「そうだな」

椅子から立ち上がり、実験の資料を取りに実験部屋へと向かった。その際アリスのほうを振り返り見たのだが、やはり身動きひとつせずどこかを見つめたままだった。いや、むしろ視界にはなにも映っていないのかもしれない。

魔理沙が茸を入れていた袋は実験部屋の隅に置かれていた。綺麗に畳んであるあたり、魔理沙がソファに倒れこんだ後にアリスがやってくれたのだろう。そして机の上に丁寧に置かれていた実験の資料をその袋に詰め込んだ。以前のアリスが見たらあまりの粗雑さにまた溜息を漏らしていただろう。

「じゃあ帰るぜ」

そう言ったのは、玄関の扉の隣に立てかけてあった箒を取りながらだった。

箒の柄に帽子とマフラーがかけてあったのも、魔理沙は今に至るまで気づかなかった。

「なんだよ、くそ」

いつも魔理沙の知らぬところで気を配ってくれていたというのに、自分はそれに気づかず、あまつさえアリスの様子がおかしいというのになにも出来ずに帰るしかないという事実、魔理沙は己の無力さを罵った。

いつまでもここに居ても仕方ないと諦めてドアノブに手をかけたところで、魔理沙は服の裾を引っ張られたので振り返ると、そこには俯きながら立つアリスがいた。

「どうし」

「た」と言えなかった。

アリスは黙ったまま魔理沙を抱きしめ、震えながら長く息を吐いた。魔理沙はアリスより背が低いので、ちょうどアリスの首に顔があたる形になる。そのためアリスがどんな顔をしているのか見えないうが、身体がかすかに震え、ときどき肩が痙攣したように動いてい

ることからアリスが泣いていることはすぐにわかった。

「ごめんなさい」

懺悔するかのような囁きに、魔理沙はなんとも言えずただアリスを抱き返すことしか出来なかった。

アリスに何があったのかはわからない。それでもアリスをこのまま一人にすることなど、出来るはずがなかった。気の利いたことでも言えればいいのだが、魔理沙は自分の語彙の無さを理解しているので、下手なことを言うよりもアリスが泣き止むのを待つことにした。

魔理沙の肩に回されたアリスの腕が解かれたのは、身体の震えがおさまってからだった。アリスはそのまま魔理沙の肩を両手でわずかに押すように身体を離すと、涙ぐんだ目で魔理沙の目を見つめて消え入りそうな声でもう一度「ごめんなさい」と言った。ただし、それが言葉通りの意味でないことぐらい魔理沙にだってわかった。アリスは言外で「ありがとう」と言ったのだ。

目元にうつすらと涙を湛えながら、アリスは母親が子供に向けるような優しい笑顔を向けてきた。

その笑顔を見て魔理沙は思わず頬を赤らめながらも、突然立場が逆転たような気がして少し複雑な気分になった。

「落ちていたか？」

その問いに、アリスは小さく頷くことで答えにした。

「で、いきなりどうしたんだよ」

「それは……」

この問いには顔を背けて答えなかった。

これはいくら訊いても無駄だな、と判断した魔理沙は、諦めたように肩をすくめてから再びドアノブに手をかけた。はっとしたように顔を上げたアリスに、笑顔で「また来るぜ」とだけ告げて扉を開けた。

昼前とはいえ冬の空気は冷たく、飛んでいるということもあって頬に刺すような痛みが走る。

マフラーを口元まで引き上げる。幾分かは寒さを誤魔化せるが、それでも寒いものは寒い。

しかし、これぐらいの寒さのほうを考え事をする上ではちょうど良いのかもしれない。

「……」

魔理沙は寒さに身体を震わせながら、アリスの様子がおかしかったことについて考えていた。

まず、昨晚のアリスと紫のやり取りだ。

あの二人が一緒にいることも珍しいが、宴会の企画をしていたなどそれ以上に珍しい。いや、これは完全に嘘だと判断していいだろう。そもそも何のきっかけもなしに突然そんなことを企画するような二人ではないし、それをわざわざ魔法を使ってまで隠す必要はないはずだ。もし、他の者に聞かれたくなかったのだとしても、もつとうまい隠し方があったはずだ。

次にアリスの異様な態度の変化について。

紫が去ってからというもの、魔理沙の些細な発言に過剰な反応を見せていた。しかも他愛も無い会話の中でだ。実験中はそれ以外の会話がほとんど無かったため気づかなかったが、今朝の会話でのアリスの反応はあまりに奇妙なものだった。特に魔理沙の「宴会なんて久しぶりだ」という発言に対するそれはあまりに異常だった。たしかに一ヶ月で久しぶりというのは大げさだったかもしれないが、なにもあそこまで

「まてよ」

もし、魔理沙の発言そのものに驚いたのではないとしたら？

久しぶり　つまり、時間に関する何かがあったのでは？

紫との会話は、それに関係することなのでは？

どれも仮定の域を出ないが、それでもあの二人が何か企んでいるということは確信していた。それはいままでにいくつもの異変を解決してきた魔理沙の勘がそう言っているのだ。

とは言え、それが何なのかを確かめるにはあまりに情報が少なすぎる。

家に戻ったら実験結果を魔道書にまとめようと思っていたのだが、少し寄り道をすることにした。

情報を集めるなら、ぴったりの人物がいる。

「まずはあいつに」

途中で言葉を切ったのは、予想外の邪魔者が現れたからだ。

魔理沙は左手で箒を支えながら、右手で腹部を押さえた。

「腹、減った……」

ぐう、と情けない音がする。

そういえば、昨晚から実験に集中しすぎて何も食べていないではないか。

情報収集は、腹ごしらえをしてからでも遅くないだろう。

魔理沙はまっすぐに自宅へ向かうことにした。

一章 (Part 6)

冬には独特の静けさがある。木々は葉を散らし、虫は鳴くのを止め、動物は眠りにつき、人間は家に閉じこもる。まるで世界から生き物がいなくなってしまうたかのような、そんな静けさだ。そしてそれは博霊神社の物悲しさを際立たせていた。

今日も、参拝客が来る気配はまったくない。

しかし、どんなに参拝客が来なくとも、巫女としての仕事はこなさなければならぬ。

霊夢は寒空の下、身体を冷たい風に震わせながら竹箒で境内に散らばる落ち葉をかき集めていた。時期が時期なので落ち葉の量は多く、集めた落ち葉の山はかなりのものになった。

本当は早朝からはじめなければならないのだが、冬の寒さに負けて布団からどうにも出ることができなかったのだ。ただ、空腹を睡眠で紛らわしたいという気持ちがあったのかと訊かれれば、答えは否だろう。

まだ風に吹かれてかさかさと舞う落ち葉がいくつも見えるが、すべてを集めるにはこの境内はあまりに寒く、そして、これ以上の労働は耐え難い苦痛でしかなかった。

落ち葉の山から視線を空に移し、深くため息をついた。それは冬の空気の侘しさに対するものではない。空を流れる雲の形が変わるたびに、いろんな食べ物に見えてしまう自分が情けないのだ。

もう、余裕なんてどこにもありはしなかった。

落ち葉の山の側でしゃがみ、用意してあったマッチでそれに火をつける。火は徐々に広がり、ぱちぱちと音を立てながら燃え上がり、一筋の煙が上空へと伸びていった。

霊夢は火のついた落ち葉の山に手をかざして暖を取りながら、煙の筋を目で追いかけるようにもう一度空を見て、誰に聞かせるわけでもなく呟いた。

「宴会、やろうかしら」

紫の提案に賛同するというのは甚だ本意ではあるが、そうも言っていない。なにしろ今朝ついに残りわずかだった食料を食べつくしてしまったのだ。ここらで食料を調達しないと、それこそ命に関わる。

ただ、自分から動くだけの気力など残っているはずもなく、霊夢は参加者の募集を別の人物に任せることにした。

その人物　伊吹萃香は、自身の能力によって宴会の定期開催を定着化させようとしたことがあるほどの酒好きで、宴会の話をすればいくらでも手伝ってくれるはずだ。

『密と疎を操る程度の能力』と呼ばれる萃香のそれは、物質から精神に至るまであらゆるものを萃めたり疎めたりすることができ、以前萃香が起こした異変も、幻想郷中の人や妖怪の思いを萃めたことによるものだった。

霊夢は神聖な巫女とは思えないほど気だるげに立ち上がると、誰もいない空に向かって、口の横に手を当てて萃香を呼ぶのに最も適した言葉を叫んだ。

「萃香ーうまい酒が飲めるわよー」

数秒そのまましていると、背後に気配を感じたので振り返る。すると、今まで何もなくあった空間に霧のようなものが集まって小さな雲のようにになると、それは瞬間に少女の形になって霊夢に飛びついてき、ぐるぐると回りだした。

「酒ー！」

まともな食事が取れていない霊夢に、この無邪気な笑顔で戯れてくる少女を支えるだけの体力などあるはずもなく、なんとか少女を引き剥がして地面に立たせると膝に手を当てて肩で息をした。まさかこれほどとは霊夢も予想だにしておらず、大きなショックを受けていた。

少女は「どうした？」と言わんばかりの表情でこちらの顔を覗き込んでくるが、霊夢は一瞥もくれてやることなく呼吸を整えた。

「……萃香、お願いだから今の私に過度の運動をさせないで」

萃香と呼ばれた少女は、今の言葉が意味するところを霊夢のやつれた頬と、ぐう、と鳴った腹の音から判断したのだろう。今までの無垢な子供のような顔が、哀れみのそれに変わった。その変化は雰囲気だけでも十分伝わってきたが、霊夢は一顧だにしなかった。見れば、余計に心の傷を抉ることになると容易に想像できたからだ。

なんとか喋れるまでに回復すると、霊夢は背筋を伸ばして萃香の顔を見た。萃香は霊夢よりもかなり小さく、頭のとっぺんが霊夢のへそのあたりにあるので今の位置では若干話しづらいが、今しゃがむと立っているのも辛いのかと誤解されそうなので、そのまま喋ることにした。

「あんたに頼みたいことがあるんだけど」

「酒はー？」

どうやら友人からの頼みごとより酒のほうが重要らしい。

萃香のことを見た目が少女であるということしか知らないものがこの会話を聞けば間違いなく誤解するだろうが、実際に萃香を一目見ればその誤解も解けるだろう。なぜなら萃香の頭の両側には、体格とは不釣り合いなほど大きな角が生えているのだから。

そう。萃香は人間ではなく、妖怪なのだ。

しかもそこらの木っ端妖怪など足元にも及ばぬ力を持ち、妖怪の中でも最強と謳われる種族、鬼なのだ。

鬼はその強大な力で人間だけでなく妖怪からも畏怖の対象とされ、妖怪の山と呼ばれる場所では天狗や河童たちを支配していた幻想郷でもトップクラスの力を持つ種族なのだが、博霊大結界が創造されるころには幻想郷から姿を消していたため、霊夢は萃香に出会うまで鬼という存在を知らなかった。だが話を聞いてみると、鬼たちは地底に移住していたらしく、萃香もその移住した鬼の一人で、最近ではこうして頻繁に地上に出てきているそうだ。

霊夢はわざとらしい咳払いをしてから萃香を見た。ただし、こっちの話を最後まで聞け、という明確な意思を視線に乗せて。

こちらの意思が伝わったのか、萃香は叱られた子供のように肩を落とした。

「さっきも言ったけど、頼みたいことがあるのよ。お酒はそのあと」
「頼みごと？　どんな？」

萃香が首を傾げると、肩にかかっていた小麦色の髪の毛の束がはらりと落ちる。見た目が年端もいかぬ少女の姿のせいで色気はまるで感じないが、腰のあたりまで伸びた艶やかな髪は同じ女としてうらやましく思う。

「あのね」

霊夢は萃香に宴会の参加者を集める手伝いを頼もうとして、やはり考え直すことにした。

萃香が異変を起こしたとき、霊夢はそれを食い止めるために萃香と戦い、一応は解決という結末を迎えた。にも拘らず、自分が同じことをするというのはどうなのだろう。霊夢の知り合いの中でそれを非難するものはいないだろうが、博霊の巫女としての体裁を保たねばならないのも、また事実なのだ。

いつまでも黙ったままの霊夢を不思議そうに見つめる萃香を他所に、霊夢は別の案を考えることにした。

とりあえず、別の人物に頼むのが妥当だろう。たとえば、迅速かつ広範囲に情報を伝えてくれるような……

「あ」
いる。

まさにぴったりの人物が。

突然俯いて口に手を当てながら黙りこくってしまったかと思えばいきなり顔を上げた霊夢を、萃香は口をぽかんと開けたまま眺めているだけだった。

それに霊夢が気づいたのは、声を上げてすぐだった。

なにしろその時の萃香の顔は、1000年以上生きた大妖怪とは思えぬほど間抜けな顔をしていたのだから。

つい口元がほころびそうになるのを堪えることはできたが、背を

屈めながら話し出してしまったのはほとんど無意識のうちだった。

「ねえ、文あやを呼んでくれない？」

「文を？ 別にいいけど」

言って、萃香は霊夢に背を向けてから空に両手をかざした。能力を使うのにそういう動作が必要だという話は聞いたことがないので、萃香が雰囲気を出すためにやっているだけのだろう。

「よし、これでしばらくすれば来ると思うよ」

腰に手を当てて貧相な胸を張って自慢げな笑みを浮かべる萃香を見て、つい頭を撫でて褒めてやりたくなるが、さすがにそれは子ども扱いをされたと怒るかもしれないので、やめておいた。

萃香の能力は何度も見たことがあるので、件の人物はあと数分もしないうちに飛んでくるだろう。

話も終わって気が抜けたのか急に寒さを思い出して身体が震えたので、霊夢は振り向いてしゃがむと、もう一度焚き火で暖を取ることにした。

萃香が背中にのしかかって何度も「酒はー？」と訊いてくるのは少しうつとうしく感じたが、これはこれで暖かいので放つてく。ただ、これなら子ども扱いしてもそんなに怒られなかったかもしれない、と思った。

射命丸文しゃめいまるあや

彼女は妖怪の山に住む烏天狗の一人で、普段は新聞

記者として幻想郷中を飛び回ってネタを追いかけており、文々。ぶんぶんま新聞ぶんぶんという新聞を発行しては定期購読してくれないかと勧誘してくる。

しかし、書いてあることは大して面白みもないことばかりなので、定期購読者が増えることはまったくなく、日々そのことを嘆いているようだった。

だが、それは霊夢にとってうつてつけだった。

久しぶりの宴会ともなれば、参加者は皆羽目を外して新聞のネタ

になるようなことをしてくれるはず。それを餌に文に号外を出してもらえように頼むのだ。異変の途絶えてしまった今なら、きっとうまく釣れるはずだ。

「そんなの私に頼めばいいじゃん」

とは萃香の言。

博霊の巫女としての話をしてやってもいいのだが、おそらくつまらないことにこだわる奴と思われて終わりだと思ったので、適当な言い訳をして誤魔化しておいた。

ちなみに、しょっちゅう一緒に酒を飲もうと言ってくるくせに、なぜいままで能力を使うなりして宴会を開こうとしなかったのかと訊いたら、地底で他の鬼たちと飲んでいたからだそうだ。実に萃香らしい答えだった。

「じゃあよろしくね」

宴会を開くにあたって、萃香にはある役割を担ってもらうことにした。うまい酒には、うまい肴が必要になる。萃香にはその肴を作ってもらうのだ。

萃香と並んで焚き火に当たっていると、遠くの空にこちらへ向かって飛んでくる人影が見えた。

「来たわね」

立ち上がり、人影に向かって手を振った。それに気づいたのか、人影は手を振り返す代わりに境内へと降り立った。

「おはよう、文」

冬だというのにふとももが丸見えの黒いミニスカートに半袖の白いシャツ、首には秋の装いを切り抜いたかのような色鮮やかなもみじの刺繍が施されたマフラーを巻き、これまた真っ赤に紅葉したもみじのように紅い一本歯の下駄を履いているという、人間からしたら考えられないような服装に、霊夢はさらに寒さが厳しくなったような錯覚に見舞われた。

霊夢が挨拶すると、文も笑顔で挨拶を返してきた。

「おはようございます霊夢さん……と、萃香さん」

萃香の名前を言うときに笑顔が引きつり、声が若干畏まった風になったのは、まだ二人の間に蟠り^{わたかま}が残っているからだろ。鬼がまだ幻想郷にいた頃は、鬼と天狗は完全な上下関係にあったので、いまでも文は萃香に頭が上がらないのだ。鬼たちがまた妖怪の山に戻ってくれば、再び鬼を頂点とする社会に戻ってしまうので、文としてはできることなら鬼が幻想郷に戻ってきてほしくないのだ。もちろんそんなことを直接言えるわけもなく、今のようになやんだ態度になっってしまうのだ。萃香もそれを理解しているようで、「ん」と小さく言って手を上げるだけだった。霊夢が生まれるはるか昔より続く蟠りというのは、そう簡単に無くなるものではない。

文と萃香の間に流れる空気に耐えかね、霊夢は二人の間に割って入るような形で話を切り出した。なにより、こんな空気にするために文を呼んだわけではないし、

「いきなりで悪いんだけど、文に頼みたいことがあるのよ」

「……なんですか？」

滅多に使うことのない営業用の笑みを顔に貼り付けて言うと、文は隠すことなく嫌そうな顔をしてきた。

さすがに貼り付けた笑顔が引きつってしまったが、霊夢はさらに話を続けた。

「文に号外を出してもらいたいんだけど」

「なにか特ダネでも!？」

霊夢が言い切ると同時に、文はポケットから手帳を取り出して表紙に引っ掛けてあったボールペンを取っていた。

目にも留まらぬ速さとはこのことが。

さっきまでの態度はどこへやら。すでに文の顔は新聞記者のそれになっていた。

あまりの速さと変貌振りに、霊夢は驚くのを通り越して呆れてしまった。

「いや、特ダネではないわね」

そう言くと、文は心底がっかりして「そうですか」と嘆息して手

帳をポケットにしまった。

どうやら余程新聞のネタがなくて困っているらしい。

自分では気づいていないが、霊夢は営業用ではなく本物の笑顔に変わっていた。

そして落胆する文に、芝居がかった言い方でこう言った。

「でも、私に協力してくれたらネタになることに出会えるかもしれないわよ？」

霊夢は、文の耳がぴくりと動いたのを見逃さなかった。

魚が餌に食いついた。

ただ、釣り針が引つかかるにはまだ浅い。

こちらに顔を向けてきた文に、すかさず次の言葉を投げかけた。

「実は今日にでも宴会を開こうかなと思ってるのよ」

「宴会ですか」

聞き返してはきたものの、それは無意識に言っただけなのかもしれない。文の目は霊夢ではなく、霊夢の言葉の真意に向けられていた。

十分に興味を引くことができたらしい。

ここまできたらこっちのものだった

「そう。最近冬なのにまったく雪が降ってないでしょ？そこで萃香に頼んで雪を降らしてもらったのよ。ひさしぶりの雪見酒できつとみんな羽目を外して面白いことをしてくれるはずよ」

萃香に作ってもらう肴とは、このことだ。

冬になればいつも嫌というほど降っていた雪が、今年はまだ降っていない。宴会を開こうにも、ただ寒い場所に集まるだけでは盛り上がり欠けるというものだ。そこで萃香の能力を使って雪雲をこの博霊神社の上空に集めてもらい、一年ぶりの雪見酒を楽しもうということにしたのだ。それに霊夢の知り合いには幸か不幸か酒癖の悪い連中が多いので、適当に煽れば新聞のネタになりそうなことのひとつやふたつはやらしてくれるだろう。

霊夢の話をふむふむと頷きながら聞いていた文に、霊夢はさらに

詳しい内容と号外に書いてほしいことを説明しようとして、得心がいったように少しだけ深く頷いた文が言った「つまり」という言葉に遮られた。

魚が、釣り針をしつかりと咥えこんだ瞬間だった。

「つまり、私に号外を出させて参加者と、それに食材も全部集めてしまおうというんですね？　そして余った食材を全部もらおうと。私は皆さんが酒に酔って面白いことをすればそれを記事にする。たとえ記事なるようなネタがなくても、私は号外の報酬として何も持つてこなくても料理とお酒にありつける、と。」

これから言おうとしていたこと、黙っていたように思っていたこと、それらをすべて言い当てられ、霊夢は萃香ほどではないにしろ口を開けたまま呆然としてしまった。

どうやら文は優秀な新聞記者だったらしい。

黙ったまま感心していた霊夢は、文の「そういうことですよね？」という声で我に返った。呆然としたといってもほんの数瞬のことだと思う。

「……ええ、そうよ」

ややつつかえ気味に言くと、文はなぜかほにかみながら笑い、頬をぽりぽりと搔いてこんなことを言ってきた。

「いやー、実は私もひさしぶりに皆さんと宴会でもしたいなと思っ
てたんですよ」

たしかに雪見酒は一年ぶりだが、宴会自体は一ヶ月前にやっているのに何故久しぶりなのか。

妖怪というのは1000年以上生きるものがほとんどで、目の前で「ははは」と笑っている文も、後ろで焚き火に手をかざしている萃香もそうだ。そんな長命の妖怪たちからしたら、それこそ、一ヶ月など瞬きにも等しい時間だろう。だから「またか」と言われるならわかるが、「ひさしぶり」と言われるのは……いや、こつも考えられる。人間の寿命というのは妖怪に比べてあまりにも短い。だから人間と付き合う妖怪たちは、一緒にいられる短い時間を人間以上

に大切にしているのかもしれない。だからこそ「ひさしぶり」なのだろう。ほんの一瞬でさえ、妖怪の中では何倍もの思い出として蓄積されているのかもしれない。

この際直接訊いてみようか。

そんなちよつとした好奇心は、霊夢の視界に入った人影にかき消された。

「……魔理沙？」

文の背後、神社を囲む森の上を飛んでこちらへと向かってくるのは、霊夢の旧友、魔理沙だった。

萃香に魔理沙を呼ぶように頼んだ覚えはないが、そもそも普段から用事がなくても来るのだから気にする必要もないだろう。

霊夢の視線に気づいたのか文が後ろを振り向き、それに釣られて萃香も立ち上がって二人の視線の先に目を向けた。

魔理沙は文の目の前で箒から飛び降りるように着地した。魔理沙のトレードマークとも言えるつばの広い帽子を風で飛ばされないように手で押さえていたが、何の抵抗もないスカートは着地の際に大きく膨らみ、素足が見えていた。女なら帽子よりスカートを気にするべきだと思うのだが、それを魔理沙に言ったところで無駄だとかっているので、霊夢は無視することにした。

「何しにきたのよ」

「あんまりな言い方だな」

魔理沙はわざとらしく肩をすくめてそう言っていると、箒を肩に立てかけるように持ち、文と萃香を流すように見ながら空いている右手を上げた。真面目に挨拶をするようなやつでもないし、今更そんなことするような仲でもないの。霊夢はわざわざ挨拶を返すことなどしなかった。萃香も魔理沙同様手を上げるだけだったが、文はしっかりと「おはようございます」と言った。普段は飄々としたところがあるように見える文だが、根は真面目なのだろう。

「それに今日は霊夢に用があつてきたわけじゃないぜ」

そう言つと、魔理沙は文に視線を移した。

どうやら文を探してここに来たらしい。

文も魔理沙の視線でそれに気づいたらしく、姿勢を正してから手帳の入っているスカートのポケットに手を伸ばし、だが、すぐに下ろしてしまった。文の少し後ろに立っていたので、その様子が視界の隅に移っていた。職業病とでも言うのだろうか。その動作はすでに癖になっているようだ。

「私に何か用ですか？」

「おう。実はおまえに頼みたいことがあるんだよ」

「魔理沙さんですか」

文の言葉に魔理沙は、お、という顔をして霊夢のことを見た。

萃香ではなく真つ先にこちらを見たあたり、なかなかいい勘をしている。もっとも、萃香が文に頼みごとをするなどありえないという考えからかもしれないが。

「なんだ、霊夢も文に用事があつたのか」

「宴会でも開こうと思つてね。そのことを号外でみんなに知らせてもらおうと」

そこで言葉を切つたのは、魔理沙が眉根にしわを寄せていたからだ。

変なことでも言つただろうか。

そんなことを思っていると、魔理沙のほうから口を開いた。

だが、待っていたのは予想だにしない質問だった。

「宴会つて、おまえ一人で企画したのか？」

「は？」

意味がわからない。なぜそんなことを訊いてくるのか。

霊夢は魔理沙以上に眉根にしわを寄せながらこう答えた。

「まあ、そう言えなくもないわね。もとは紫が言い出したことなんだけど」

霊夢が言い切るや否や、魔理沙は「紫が！？」と叫んだ。

あまりのことに霊夢が言葉を失っていると、魔理沙は叫んでしまったことを謝るように帽子をぐつとさげて顔を隠してしまった。

只ならぬ雰囲気、文と顔を見合わせてしまった。

様子がおかしいというより、魔理沙は何かを知っているという風だった。

「ちよつと魔理沙、どうしたのよ」

霊夢が声をかけると、魔理沙はようやく顔を上げた。が、その顔はさっきまでとはまるで別人のようだった。

「霊夢、紫はなんて言ってた？」

相変わらず要領を得ない質問に辟易しながらも、魔理沙の質問に答えることにした。きつと、答えなければ何度でも訊いてくるだろう。

霊夢は顎に手を当てながら昨日の紫とのやり取りを思い出した。

「えつと……私がお腹が減ったって言ったら突然現れてひさしぶりに宴会でもないか、て言ってきたのよ。それで」

霊夢が再び言葉切る羽目になったのは、魔理沙が愕然と目を見開いていたからだ。

間違いなく、魔理沙は何かを隠している。

それを理解するのと、魔理沙が口を開くのはほぼ同時だった。

「昨日、アリスの家に紫が来てたんだ。でもわざわざ魔法で声が聞こえないようにしてて、二人だけで宴会を企画してたから聞かれたくなかったって……」

隠し事が親にばれて叱られている子供のような顔で吐露した内容に、霊夢は紫に対する不信感を抱いていた。

アリスと企画しているなどという話は聞いていないし、そもそも二人だけで企画しているというのなら、なぜ自分に宴会の話を持ちかけたのだろうか。

魔理沙が何か知っている風だと思った謎が、ようやくわかった気がした。

あれは、何度も異変を解決してきた経験からくる第六感ともいえるべき勘が働いたからだ。

魔理沙は新たな異変の予兆を感じ取っているはずだ。だからこう

して紫との会話を訊いてきたのだ。文に用事があるというのも、情報集のためだというなら合点がいく。文ほど幻想郷の情勢に詳しいものなどいないだろう。

「それで、今朝もアリスとその話をしてただけで、私がひさしぶりだって言ったらアリスのやつ、えらく驚いてさ。あの時のアリスは絶対に何か隠してると思うんだ。それなのに一緒に計画してる紫は霊夢にひさしぶりだって言っただる？絶対おかしいぜ！」

「たしかにそうね」

宴会については紫がひさしぶりだからと言い出したのに、紫と二人で企画しているらしいアリスはまるでそう思っていないらしい。しかも魔理沙のひさしぶりという発言に対して、アリスは魔理沙が不審がるほど驚いていたという。アリスが何かを隠しているという魔理沙の意見には賛同するが、それとは別に、紫とアリスとの間に妙な食い違いがある気がするのだ。

しかし、これだけの情報でそれらすべての謎を解くのは難しい。もっと別の意見が欲しい。

霊夢は用があると言われたのに、ほつたらかにされて少し不機嫌そうに話を聞いていた文に水を向けた。文はのそり、という音が聞こえてきそうなほどゆっくりとこちらを見た。

「文はどう思う？」

その問いに文はこれまたゆっくりと目を閉じて、それからふむ、と頷いてから目を開いた。

文にはいくつか癖があるのかもしれない。

「もしかして、アリスさんは魔理沙さんが宴会をひさしぶりだと思っっていることに驚いたのではなく、そう思ってしまったことに驚いたのでは？」

似ているようで、まったく違う。

前者の場合、そこにはあるのはお互いの価値観の相違だけだ。『あなたそう思ってるかもしれないけど、私はこう思っているわ』

そんな意見の不一致による驚きだ。だが後者の場合は少し違う。

『そんな考え方は間違っている。おかしい。なぜそう思ってしまったているの?』　　というような、はじめから相手を否定した考え方だ。これを文の考察に当てはめると、アリスは魔理沙が宴会をひさしぶりだと感じるなどありえないと信じていた、ということになる。つまり、前もって聞かされていたということになるのだ。『これから開催される宴会はひさしぶりのものではない』と。だからアリスは魔理沙の発言に驚いた。与えられた情報と違っていたから。信じていた情報が間違っていた。違つてはならないものが違つていたから。

そしてその情報の発信源は、間違いなく紫だ。

霊夢が紫とアリスの間に感じた食い違いはこのことかもしれない。けれど、そうなると気になることがある。

「文の言いたいことはわかったわ。それに私もその考えには同意する。けどそうなると、紫はわざわざ私が宴会を開くことをひさしぶりだと思っていないことをアリスに伝えていたということになるじゃない?」

紫がそんなことをアリスに伝える理由がわからない。そんなことに何の意味があるのか。

霊夢の疑問に、文は顔を背けるように目を閉じた。

人の感情や言動の裏を読み取ることが得意とする文でも、この問いには答えられないらしい。

当然だ。あまりに不可解すぎる。

「これ以上はさっぱりだな」

魔理沙が箒に体重をかけながらおおげさにため息をついた。

たしかにこれ以上のことを推測するには情報が少なすぎる。紫を問い詰めれば済む話かもしれないが、おそらくまともに相手にされることなく逃げられるのが落ちだろう。それにもし異変でなかったとしたら後が怖い。

もつと情報がある。

それは魔理沙がここに来た理由であり、そして魔理沙の顔を見る

に、そのことを言いたそうしていたのでその役割は譲ることにした。
「というわけで文、おまえにはこのことについての情報を集めて欲しいんだ。頼めるか？」

文は霊夢のほうをちらつと見た。

文としては仕事を請け負った以上、優先順位というものがある。

だから霊夢の許可が欲しいのだ。

霊夢としても新たな異変の可能性があるなら、文に情報を集めてもらうのが最適だと思うし、号外を配ってもらう片手間にできることなのでこちらとしても困ることは何もない。

「私からも頼むわ」

「わかりました」

文は気持ちのいい返事とともに一際大きく頷いた。

「とりあえずここであつたことは黙ってた方がいいな」

それにはさつきからずっと黙ったままだった萃香も含め、その場の全員が同意した。

文と同様幻想郷中を監視してる紫にばれぬように情報を集めるなら、できる限り秘密裏に行わなければならない。

「さて、では私は号外を作り一旦家に帰りますね」

各々が意見を言い尽くしたのを確認してから、文はそう言つて一歩下がって飛び上がった。直前に萃香への会釈も忘れていなかった。自宅へと飛んでいく文を見送つてから、地面に置いたままの箒を持ち上げた。焚き火にしていた落ち葉の山はほとんど燃え尽きていた。

「あんたらはどうするの？」

霊夢は振り向きながら訊くと、魔理沙はすでに箒に跨っていた。

「私も帰るよ。実はまだ飯を食ってないんだ」

いままで話に集中していて忘れていたのに、今になって霊夢は自分も腹を空かせているのを思い出して腹を押さえた。ぐう、と音が鳴り、つい魔理沙と萃香のほうを見てしまった。二人から気づいていないぞ、という雰囲気はひしひしと伝わってきたのでこっちは無

視することにしたが、それでも空しさが消えることはなかった。

「私もちよつと用事ができた」

ずつと黙っていた萃香が立ち上がると、突然そんなことを言つて身体を霧状にして消えてしまった。

萃香の能力は自身の存在を疎めることによって霧のようになることもでき、境内に現れたときもその状態から存在を萃めて人の形に戻つたのだ。

「あいつどうしたのかしら」

文が来てからというもののどこか様子がおかしかったが、文と何かあつたのだろうか。鬼と天狗の間には霊夢が知らないような問題が他にもあるのかもしれない。

首を傾げてそんなことを考えていると、ぶわつと風が吹いて落ち葉の燃えカスが舞つたので思わず手で顔の前に壁を作つた。

指の隙間から覗くと、左手で箒を持つてふわふわと浮きながら、右手を顔の前で立てて謝る魔理沙の姿が見えた。

「ちよつと、もっと静かに飛びなさいよ！」

霊夢が怒鳴りつけると、魔理沙はいはいと言いたげな顔で手をひらひらとさせた。

箒から引き摺り下ろしてやろうと思つたが、どうせ魔理沙が逃げ回るだけで体力の無駄遣いになると判断してやめた。

「じゃあ私は帰るぜ！」

魔理沙はそう言つて逃げるように飛び去つていった。そのときの風でまた少し燃えカスが舞つたが、もう気にするのも馬鹿馬鹿しくなつてきたので、持っていた箒でまた掃除をすることにした。

宴会のことも紫とアリスのこと文が戻ってくるまではどうにもならない。霊夢ができることは、宴会の準備をするために燃えカスで散らかつたこの境内を片付けることだけだつた。

「……めんどくさ」

そんな呟きとともに鳴つた腹の音が、無人となつた境内の哀愁を余計に引き立てていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6236p/>

夢幻の境界

2011年2月21日13時55分発行